

(1) 単元名： 5年 自分を中心に物語を書こう。
6年 随筆を書こう。

(2) 本時の目標： 5年 自分の体験をもとにした物語を想像し、創作メモを作る。
6年 随筆らしい表現を心がけながら、下書きをする。

平成25年度4月、新赴任の教師である。

これまでと勝ってがちがう、教職経験初のへき地の複式授業への挑戦である。前年まで都市地区の大規模校で経験を積んできた授業の指導方法が全く通用しない。へき地の複式授業におけるジレンマの中で「これでいいのだろうか？」常に不安を抱きながらの授業経営が進められていることが予想されるが…そこは北国小の校長先生や同僚が常に声を掛け合って支え合っている。「安心」は子どもだけでなく同僚にも還元されなければならない。



☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。

0:00 【初めての校内研修授業】

6年1名、5年2名、計児童3名、教師1名。

参観者：大人5名である。

子どもの数より、大人の人数が多い。授業者にとってこれまでに経験のない授業風景であろう。本日まで何度か同僚の授業を参観しての挑戦である。



『焦らず・無理せず・ゆっく〜り』と、国頭学びの会「ゆい」のモットーである。「すごい授業」より「しっとり素敵な授業」を目指してほしい。

0:40~1:40 【ことわざフラッシュカード】

教師の笑顔が素晴らしい。子ども達の顔も教師の顔



が反映され、あふれんばかりの笑顔である。子ども達は実に楽しそうに教師が提示するフラッシュカードを読みあげていく。さらにいいのは、時間をかけずあっさりやっているところである。子ども達の顔には、「今日もちゃんと言えた。」満足な表情がうかがえた。

5:00 【教師のアイデア】… 本時は5年生が「物語」、6年生が「随筆」を書く授業である。先に「創作のお話し」を書き終えた4年生の男の子の「お話」の音読を授業始めに設定した。自分の教室の子ども達の学習意欲の喚起を図りたい教師の意図とアイデアである。素晴らしい。ちょっとした工夫やアイデアが授業を変える。

写真②、照れくさそうに、お兄ちゃん、お姉ちゃんの前で自分の作品を音読する。ちょっとたどたどしいが、音読終了後どことなく満足と優越感を感じている表情がうかがえた。4年生の男の子は「人のためになった。」自分を認識することになったのではないだろうか。



写真①

写真①、男の子の音読に聴き入る教室の仲間達である。素晴らしい眼差しである。



写真②

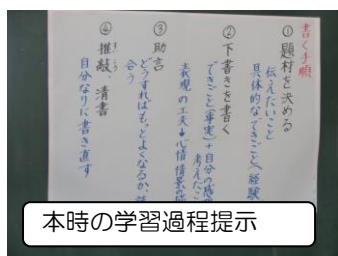
8:00 【各学年の学習課題へ】

学習過程を確認したら、5・6年が各々学習に取り組む。5年生は

2人、6年生は1人である。一つの教室で2つの黒板を使って各々で進められる複式の日常の「わり」の授業風景である。教師は両学年に気配り、目配りの授業である。

6年生の敏則は一人でやることに慣れているのか一人で黙々とテキストと向き合ってる。

教師の位置、写真③の赤の点線のところに座ると両方の様子がうかがいやすいかな？



本時の学習過程提示



写真③

22:30 【複式における「わたり」と「学び合い」】

教師が他学年に関わっているときは、自分たちで進めなければならないつまり「学び合い」の必然が生まれる。教師への依存ができないのであるから「分からないこと」



「確認したいこと」は自然に隣の仲間に向けられなければならない。複式の授業において、教師が「わたり」でいない時は「自分たちで学び合う」を習慣化したい。教師依存から脱して、「自分と仲間との協力」で進む。

6年生に関わる教師に遠くから「質問」する。学習のルールの確認をしておきたい。

【一人の子への関わり】



6年生の敏則は学年一人である。つまり複式で、分けられると「学び合う」仲間がいないのである。「分からない?」を伝える仲間がいない、「これでいいのか?」確認できる仲間がいない。普通の教室なら辛く苦しい状況になるのだが6年生の敏則はこれまでの体験からこの状況を受け入れることを余儀なくされている。

「こんな時はこうすればいい」定式や方法は特に提供できないが『2対1という複式の教室で、どうすれば子ども達の中に有効な「学び」が設定できるか』ぜひ教師の一つの研究テーマとして追及してほしい。「学び」はいろいろな状況で起こる、単元の学習計画の中で、本時の学習内容・学習テーマの設定の中で、子どもの思わぬ疑問から、「指導要領の内容については、学年を見通して達成することができればよい」という割り切った考え方もへき地には必要ではないだろうか。定式がないというのはある意味、どのようにでもできるという解釈もできる。子ども達への有効な「学び」の提供を教師も「私なりに」挑戦してほしい。・・・『焦らず・無理せず・ゆっくり』と!

【辞書の活用】・・・「推敲」、「あらすじ」、「体長」を調べる。



授業途中、3回言葉の意味が分からなくて辞書が使われた。5年生はすぐに教師に依存しようとするが、さすがである、教師は視線と仕草でさりげなく仲間と辞書に向けさせた。31:00「あらすじ」について涼香さんは「あは〜、くわしくじゃなくて、かんたんに書くんた。」と納得した。さらに授業終盤に仲間から『「たいちょう」ってどう書くの?』疑問が出た「体調」「体長」二つの言葉の説明を読んで海良さんの知りたい「たいちょう」は「体長」であることに解決した。さて、この過程をもし教師が解説していたらどうなっていたらう。

初めての学びの授業でしっかり「自分たちで解決に至ることのプロセス」を踏まえさせてくれた教師に拍手である。教師に教えられ「覚えさせられる」学習と自分で、あるいは自分たちで解決し納得することの学習はまさに、教え授ける『Teaching』から、自らの力で学び取る『Learning』のちがいである。世界の学校教育の授業は『Learning』の時代である。

【校内研修協議会より】

- 海良さんの「つぶやき」や涼香さんの「感性」から学びがあった。仲間の感性から自分の感じ方とは違う多様な学びがあったのではないか。→「他者の感性から学ぶ」
- 子どもに「迷い」を感じた。「日記」「作文」「物語」「随筆」の違いを子どもたちなりに語らせるとよかったのではないだろうか。→「語る」が互いの学びを創るのではないだろうか。

校長：教師の表情がいい、授業開始から終始教師の対応の柔らかさを感じた。見ている参観者も授業を受けてみたくなる授業だった。4年生の大和さんの活用がよかった。

↑先生授業公開ありがとうございました。

へき地の環境にはなれましたか?学校だけでなく地域性や生活環境に大きく変化があり、大変な状況の中で「驚き」と「迷い」のあることはおよそ察することができます。北国小の先生方に大いに依存し先生の迷いや悩みを共有してください。先生の「悩み」や「迷い」そして新任ならではの新たな「気づき」の共有が、他の先生方にとって「学び」になって還元されていきます。右の写真、北国小の校内研修の様子です。実にほのぼのと有意義な会話が交わされています。安心して同僚と溶け合ってください。ここ国頭村に赴任している間に、焦らずに、ゆっくりと「学び」と「学びの共同体」の理念の追求を楽しんでください。本日は本当にありがとうございました。お疲れ様でした。

